

雨の中でも、鷹狩をするのか

—「俊頼髓脳」鷹狩の歌を判ずる藤原公任の言葉の解釈について—

福岡県立北筑高等学校 黒岩 淳あつし

はじめに

「金葉和歌集」の撰者でもある源俊頼の歌論書「俊頼髓脳」は、和歌に関する興味深いエピソードが数多く収録されており、生徒に和歌を考えさせる上でも適した教材と言える。

その「俊頼髓脳」に、長能ながのう、道済みちつとという名の二人の歌人が、鷹狩という題で歌を詠み、その優劣を競い、四条大納言藤原公任に判定を頼むという話がある(注1)。その中で、公任は、長能の歌の不自然さを指摘し「鷹狩りは、雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰の降らむによりて、宿かりてとまらむは、あやしきことなり」と述べている。この文はいかに解釈すべきなのか、考えてみたい。また、授業を展開するにあたって、生徒に考えさせたい事項についても触れておきたい。

一 「俊頼髓脳」の本文

まず、本文を引用する。問題箇所傍線を引いておく(注2)。

霰降る交野のみののかりごろも濡れぬ宿負す

人しなければ

濡れ濡れもなほ狩りゆかむはし鷹の上毛うまげの雪をうち払ひつつ

これは、長能、道済と申す歌詠みどもの、鷹狩りを題にする歌なり。ともに、よき歌どもにて、人の口に乗れり。のち人々、我も我もと争ひて、日ごろ経けるに、なほこのこと今日切らむとて、ともに具して、四条大納言のもとにまうでて、「この歌二つ、互ひに争ひて、今にこ

と切れず。いかにもいかにも判せさせ給へとて、おのおの参りたるなり。」と言へば、かの大納言、この歌どもをしきりに詠め案じて、「まことに申したらむに、おのおの腹立たれじや。」と申されければ、「さらに。ともかくも仰せられむに、腹立ち申すべからず。その料に参りたれば、すみやかに、承りて、まかり出でなむ。」と申しければ、さらばとて、申されけるは、「交野のみのの」といへる歌は、ふるまへる姿も、文字遣ひなども、はるかにまさりて聞こゆ。しかはあれども、もろもろの僻事ひがのあるなり。鷹狩りは、雨の降らむばかりにぞ、えせでとど

まるべき。霰の降らむによりて、宿かりてとま

らむは、あやしきことなり。霰などは、さまざま狩衣などの濡れ通りて、惜しき程にはあらじ。

なほ、「狩りゆかむ」と詠まれたるは、鷹狩りの本意もあり、まことにも、おもしろかりけむとおぼゆ。歌柄も、優にてをかし。撰集などにも、これや入らむ。」と申されければ、道済は、舞ひかなでて出でにけり。

二 長能「霰降る」の歌について

優劣を競っている二首の歌を見ておこう。まず、長能の歌についてであるが、この歌は、大変技巧的である(注3)。

「みの」は、「御野」であるが、「蓑」を響かせており、「かりごろも」は「狩衣」であるが、「借衣」を響かせていよう(注4)。

そして「かりごろも濡れぬ」(狩衣が濡れてしまった)が「濡れぬ宿」(濡れない宿)と転じている。

「ぬ」が前者の意味では、完了の助動詞となり、後者の意味では、打消の助動詞となる。

「濡る」が、下二段活用動詞であり、未然形と連用形が同じであるため、このような表現が成り立つ。助動詞を復習するのも都合の良い箇所であろう。

また「人しなければ」の「し」が強意の副助詞であることや、「なければ」の「なければ」は「なし」の已然形であり、過去の助動詞「けれ」ではないことに注意させ、訳すと「いないので」となることなど、文法的説明をして確認したい表現である。

交野は、今の大阪府交野市の北西部から枚方市にかけての地を指すと言われる。皇室御領であった。また、桜の名所でも知られる歌枕であった。^{注9)}

訳すと次のようになるだろう。
「霰が降っている交野の御野で、狩衣が濡れてしまった。霰に濡れないように宿を貸す人もいないので。」
さて、この歌を公任はどのように評価しているか。

まず、「ふるまへる姿も、文字遣ひなども、はるかにまさりて聞こゆ。(趣向を凝らした歌体も言葉遣いなどもはるかにまさっていると感じられる)」と褒める。褒めておいて、その後「しかしあれども、もろもろの僻事のあるなり。(そうではあるが、多くの間違いがあるのだ)」と欠点を指摘するのである。
では、その「僻事」とは何か。

「鷹狩りは、雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰の降らむによりて、宿かりてとまらむは、あやしきことなり。」とある。
さて、問題にしたいのは、この箇所である。

『新編日本古典文学全集 歌論集』の「俊頼髓脳」では、次のように解釈してある。

「まず、鷹狩というものは、雨が降ってきたからといって、簡単に中止して雨宿りをするであろうか。まして霰が降って来たからといって、宿を借りて休むというのは奇妙なことである。」
図式化すると、

雨(でさえ) ↓ 鷹狩をする。
(まして) 霰 ↓ 鷹狩を中止し、宿を借りて休むのは不自然。

となる。

この解釈は、傍線部の一文を反語のように訳している。「や」などの反語の助詞は使われていないのに、このように訳するのは無理であろう。強意を表す係助詞「ぞ」が使われていることに注意すべきである。副助詞「ばかり」は限定の意味にとることができる。「え〜で」が、不可能の意味を表すことも見逃してはならない。また、「とどまる」は「中止する」の意と考えられる。

さらに、次の文も訳文では「まして」と補って訳しているが、恣意的な解釈と言わざるを得ない。

助詞の文法的な働きを踏まえて訳すなら次のようになるはずである。

「鷹狩は、雨が降るような時だけは、鷹狩をすることができず、中止するはずだ。(しかし、霰が降るようなことによつて、(雨のように濡れることはないのに)宿を借りて泊まるというのは、不審なことである)」
続く次の言葉にも注目してみよう。

「霰などは、さまで狩衣などの濡れ通りで、惜しきほどにはあらず。(霰などはそれほど狩衣などのぐつしより濡れてしまつて惜しいほどにはならないであろう)」と書いてある。

「濡れ通る」とは、衣の中まで、ぐつしより濡れるということだろう。つまり、

雨 ↓ (ひどく濡れるので) 鷹狩はしない。
⇔
霰 ↓ ひどく濡れることはないので、鷹狩は行
う。宿を借りて泊まるのは不自然。

ということになるのではないだろうか。

なお、この長能の歌を本歌として崇徳院が次の歌を詠んでいる。

御狩する交野の御野に降る霰あなままだき
鳥もこそ立て(新古今集)

「あなかま(し、静かに)」「まだき(早くも)」という古語や、危惧を表す「もこそ」、係り結び、本歌取りなども合わせて説明すると良いと思う。

三 道済「濡れ濡れも」の歌について

次に、道済の歌を見ておこう。

まず、生徒には、句切れを考えさせたい。句切れを正しく理解することが、和歌の正しい解釈につながるからである。

この歌は二句切れである。そこでまず、「濡れ濡れもなほ狩りゆかむ」の意味を検討したい。「濡れ濡れ」と「濡る」の連用形が繰り返されている。「濡れながら」という意味だと考えられる。「む」は意志の助動詞の終止形。句切れであることを踏まえ、連体形ではなく終止形と考えることを確認させたい。「はし鷹」は鷹狩に用いられた鷹のことである。訳すと次のようになるであろうか。

「濡れながらも、さらに狩を続けていこう。はし鷹の上の方の毛に付いた雪を払いのけながら。」

この歌を公任は、どう評価したか。

「鷹狩りの本意もあり、まことにもおもしろかりけむとおぼゆ。歌柄も、優にてをかし。(鷹狩の本来あるべき姿があり、本当におもしろかったらうと思われる。歌の品格も優雅で趣がある)」と褒めている。「本意あり」とは、本質的なものをよく示しているということであろう。雪が降ってきて、その中を狩し続けていくぐらい鷹狩とは、楽しいものなのだろう。

そして、「撰集などにも、これや入らむ。」と、勅撰集に入りそうな歌だと述べている。勅撰集

に入集することは、この上ない喜びであったに違いない。実際、この歌は、俊頼が撰者であった「金葉和歌集」に収録されることになる^{注6}。

道済は、「舞ひかなでて」出て行ったのである。ついでながら、『新編日本古典文学全集 歌論集』では、この「舞ひかなでて」を「舞うように、この歌を口ずさみながら退出していった」と訳している。しかし、「口ずさみながら」とするのはどうであろう。

「奏づ」には、楽器を演奏するという意味もあるが、口笛を吹くという用例は見出せない。

「奏づ」には、「徒然草」五十三段「しばし奏でて後、(鼎を) 抜かんとするするに、大方抜かれず」の用例があるように、舞を舞うという意味がある。したがって、「舞ひかなでて」とは、「舞いを舞うように」と訳せば良いであろう。現代語では、「踊るように」という表現をとるところである。公任に認められ、歓喜している道済の心情をそこに見ることができ。

さて、この歌で注意したいのは、雨ではなく、雪であることだ。雪は、霰と同じように、鷹狩を中止する条件とはならないだけではなく、かえって興を深める要素になっているようにも考えられる。

雨↓ひどく濡れるので、鷹狩はしない。

雪・霰↓ひどく濡れることはなく鷹狩は行う。

ということになりそうである。

四 生徒に考えさせる歌の優劣

本文の内容を確認した上で、生徒に「君たちは、どちらの歌が良いと思うか。理由とともに説明しなさい」という課題を提示したい。まず個人で考えさせ、その後、グループ内で意見を出させても良いだろう。

長能の歌については、「かたの」「かりごろも」という「か」音の繰り返しに気づく者もあるかもしれない。助動詞の使い方など表現の工夫という点で支持する者もいるだろう。

一方、道済の歌については、雪の中「なほ狩りゆかむ」という表現に、高揚感を感じ取り、より鷹狩の面白さを伝えているといった意見が出ることも予想される。

いずれにしても、さまざまな視点から歌を検討することになり、生徒の鑑賞力を高めることにつながるのではないだろうか。

生徒の実態に応じて、「俊頼髓脳」の本文を読む前に、歌のみを示し、その優劣を考えさせても良いだろう。また、関連して「歌合」についても触れておきたい。

終わりに

鷹を使って小鳥や小動物を捕獲する鷹狩は、世界各地で行われ、日本でも古くから行われた。そもそも古代の鷹狩は、天皇や貴族が特権的に行うものであった。そして、多くの古典作品にその記事を見出すことができる^{注7}。「万葉

集」以来、和歌にも詠まれることになり、小鷹を使つて行かう「小鷹狩」は、秋の季節、大鷹の雌を使つて冬に行かう「大鷹狩」は冬の季節となつてゐる。

私たちは、身近に鷹狩を見る機会がないので想像するしかない^(注8)。雪がちらつく中で鷹狩をすることは、風情があり、好まれたに違いない。それは古典で描かれた世界への憧憬であつたかもしれない。だから、公任が言うように、霰ぐらいであれば実行する方が自然であつたのだらう。しかし、雨が降つてもしただらうと考えるのは、注釈者の勝手な思い込みであり、表現に即して読めば、雨が降れば鷹狩をしなかつたということになる。

まずは、表現に即して読むことが大切であることを確認した上で、和歌の学習にも適した、この「俊頼髓脳」の話を、授業で取り上げていきたいと思う。

注

1 「鷹狩りの歌」の話は、三省堂教科書『高等学校古典B 古文編 改訂版』、東京書籍教科書『精選古典B 古文編』『精選古典B 新版』、桐原書店問題集『ニューグレード古典 読解Ⅱ』に収録されている。

2 本文は、『新編日本古典文学全集 歌論集』（小学館・二〇〇二年）所収の「俊頼髓脳」による。読みやすくするため、表記を少し改めた。

なお、類話は「古本説話集」、「袋草紙」にもある。

3 長能は「蜻蛉日記」作者藤原道綱の母の弟。

4 長能の歌では、「借衣」の意は弱いと考えられるが、はつきりと掛詞として使用している歌もある。「いづくにか今宵は宿をかり衣ひもゆふぐれの峰のあらしに」（藤原定家・新古今集）

5 交野が桜の名所であることを示すものとしては、「伊勢物語」や俊成の歌が知られる。「今狩する交野の渚の家、その院の桜におもしろし」（伊勢物語・八二段）

「またや見む交野のみ野の桜折花の雪散る春のあけぼの」（藤原俊成・新古今集）

また、交野の鷹狩を詠んだ歌には、

「御狩すと鳥立の原をあさりつつ交野の野辺に今日もくらしつ」（藤原忠通・新古今）

「狩りくらし交野の真柴折り敷きて淀の川瀬の月を見るかな」（藤原公衡・新古今）

などがある。

6 「金葉和歌集」では、「雪中ノ鷹狩をよめる」という詞書がある。なお、長能の歌も、「金葉和歌集」（三奏本）、「詞花和歌集」に収録されている。

7 古典文学作品に見える「鷹狩」を検討したものに、三保忠夫氏の『鷹狩と王朝文学』（吉川弘文館・二〇一八年）がある。本書では、主に「万葉集」「宇津保物語」「源氏物語」「増鏡」の鷹狩について考察している。

「万葉集」には、大伴家持の鷹狩の歌がある。

卷十七 四〇一一～四〇一五

卷十九 四一五四・四一五五

「今昔物語集」卷二十二「高藤の内大臣の語 第七」は、藤原高藤が、鷹狩に出かけて宿を借りる話。九月頃、鷹狩に出かけていた高藤は急に悪天候に見舞われる。「申の時許に俄かに掻き暗がりてしぐれ降り大き

に風吹き、雷電霹靂しければ、供の者ども各々馳せ散りて行き分かれて「雨宿りをせむ」と皆な向きたる方に行きぬ」とある。そして、高藤は、一軒の家を見つけて宿を借りることになり、その家の美しい娘と深い仲になる。この時は、「雷電霹靂」したとあるので、とても鷹狩を続ける状況ではなかつた。

8 現代の鷹狩については、波多野鷹氏の『鷹狩りへの招待』（ちくまプリマーブックス・一九九七年）が参考になる。